

ボランティアを支えるボランティア

十二月二十五日に、「ドングリのプレゼント」と題して校長メッセージを載せました。生徒たちが集めた中庭のドングリが市内の幼稚園に届き、園児たちを喜ばせているというほのぼのとした話題で書きました。

あれから約二十日が経ちました。市役所に届いたドングリは担当者によって、各幼稚園に届けられました。

左下の写真はドングリを使って遊んだり学んだりしている園児たちの様子です。樋（とい）を使ってドングリを転がしている三、四歳児。ドングリを転がしてピタゴラススイッチを考えている五歳児。どの子ども目を輝かせて取り組んでいます。これから、プレゼントを受け取った園から、こういう写真が届く予定です。その時には、今度はしっかりとスペースを取って紹介しますからね。

一足先に、ドングリを集めてくれた生徒たちに写真を見せました。自分たちの日頃の行いが園児たちの笑顔に結びついたことで、どの生徒も大変うれしそうでした。喜ばせることを意図して取り組んだわけではないことが、思いのほか、園児たちを喜ばせることにつながりました。プレゼントされた側の喜びとプレゼントした側の喜びが重なり合ったことが、ボランティアの醍醐味だと言えるでしょう。

ここで考えてほしいことがあります。両者の喜びが生まれたその陰には、それを演出してくれた人たちのアイデアと手間があるということ。

今回のこと例えば、ドングリを園児にプレゼントするきっかけを与えてくれた事務員のHさん。届けられたドングリを各園に分けてくださり、喜ぶ園児たちの写真を回収してくれた担当者Oさん。少なくともこの二人の力があって、今回のドングリプレゼントが成り立ったわけです。ボランティアに取り組んだ北中生も、実は二人のボランティアに支えられていたのです。

これまで取り組んだ全てのボランティア活動するときには、中学生にやり方を地域に出てボタンティア活動するときには、中学生にやり方を教えてくれたり準備してくれたりする立場の方がいます。自分たちがボランティアをしたんだという陰にはそれを支えるボランティアが必ず存在するはず。つまり、ボランティアは、ボランティアによって支えられていると言えるでしょう。

(一月十八日 記)

